

息子ありて

鈴木 ナミ

私はここ二年余り喰つては寝て、喰つては寝ての生活なのです。老いの度が進み人生の条件が悪くなつて、これからは老ゆるばかりです。年令が峠を越えて人生の残り時間がみるまにこぼれ落ちてゆくような気がしてならないのです。すべての人間に必ず訪れてくる悲劇とは病む人間だとおもいます。老いた人間の末期の苦悩と死、孤独、悲惨な姿です。

脳梗塞と大腸ガン末期の主人。私は大動脈瘤と卵巣切除した後、女性ホルモンのバランスが崩れ多くの余病に悩まされ、逆流性食道炎が引き金となり今喘息に苦しんでいます。

三年前転倒して右半身不随の生活を送り、四ヶ月主人に介護されていた私が今介護する身となつてしまつてこの世は全くの闇の世界です。死と背中合わせの日々を送る主人、そして私。とめどもなく続くやり切れなさ。怒り哀しみ、自己嫌悪、計り知れない孤独の中に落ちこんでしまつて救いようがないのです。私が転倒して寝込んだ時、まだ元気だった主人は私のために、それは女にも及ばない気の配りようで、本当に良くつくしてくれました。明朗で活達で健康保険証を使つた事のない主人が突然倒れて正に晴天のへきれきでした。サア今度は私の出番。恩返しに主人のために介護につくさなくては女がすたとばかり意気こんでみたものの、自分の体が動かなくなり、以後、老々介護なんです。律儀でお人良し酒好きで交際が多く人に好かれていた主人。私は

脳天気で明るさだけが取柄でしたのに……。毎晩きていた酒呑みの友人達も今は全くこなくなり、定年後は電話ひとつかけてきません。越してきた今の住居は、まだ馴染が浅く心許して語り合う人もなく私は家から一步も出ない日が続き、人々との会話もなく外の空気、風に当る事もなく賑やかな人の声のする雑踏の町を歩いて楽しむ余裕もないのです。前に住んでいた家は玄関から横を入ると日当りの良い縁側があり通りすがりの人が寄りこんでお茶を飲み乍ら世間話をしていったものですし、夜は酒呑みがきていました。出合いがあれば別れがあり生物として人間もみな老ゆるし死があり、大切な親と子、愛し合った夫婦でも病苦とか死は代る事ができないのです。右半身不随の主人には私が手を借さなくてはならない。昔惚れた男。かけ替えのない主人です。できるだけの事をして上げたい気持は充分にあっても、私自身病む処不自由な体では動けなくて、何もできない事が多くて歯痒いのです。主人としては、もつとつくしてくれても良いのではないかと言う気持が顔にでてくる。そんな時「ごめんネ」の一言が言えなくて、「私だって介護を受ける身だのに」とばかり刺々しく接つてしまう時があり、心の中では詫びながらも中々素直になれない。昔はあんなに優しく可愛い妻だったのに……。ヘルパーさんは限られた時間ですしお金で雇われた人とか看護師さんと違って、家族の介護と言うものは二十四時間続くのです。障害者でもあり要介護を受ける八十すぎの老妻が配偶者を看る場合、自分の事が精一杯で笑顔も失せ会話もなくなってしまうのです。『老いた人、支え合えない冬のバラ』なんてありましたけれど正にその通り。今日の新聞に『一日に一度も口を利かぬ日のありて老い妻に済まなくおもう』

とありましたがこの氣持私には凄くよく解ります。主人をさいなみ続けるガン末期の宣告、この悲惨さは直面した者でなくては実感が湧かないとおもいます。脑梗塞によるしびれがひどく治すのはむずかしいようです。しびれのため歩けない。箸も使えず下着をつける事、靴をはく事も困難です。ベットから起き上ろうとする主人を支え助けようとしても、動けない男の体のなんと重い事か、私の足腰の力がなくて私の方がひっくり返ってしまうのです。主人は我慢強い男で私に心配かけまいと弱音を吐かぬよう努めているのがよく解り、なんとも切なくやるせないものです。「アーアなんとかして上げたい。少しでも楽になる方法はないのでしょうか、神さま助けて」

無力な自分がうらめしい！ どうあがいても避けられない老境です。残り少い人生が愛しく尊くおもえる筈なのに私は唯老ゆる事、死に怯えているばかり。告知された主人とあと何ヶ月一緒にいるか解らない。だからこそ弱い者同志いたわり合って何故暮らせないのか。あんなに明るく優しくした私はどこにいつてしまったのでしょうか。焦々して大声で怒鳴り散らしてみたい。台所にある茶碗を全部石堀に叩きつけてみたい衝動にかられるんです。本当は私達は人も羨む仲の良い夫婦なのですが時々溝を作ってしまうのは、私の難聴のせいなのです。一寸それつの回らない主人の声聞きこえても、意味が解らなくて四回五回もきき直すと、相手は焦々し私自身も情けなくなりす。時には傷つけ合いそれを許し合っている二人の生活でもあるのです。案じ合っているのもよく解ります。通院以外私は家から外に出た事はないと言っても、回覧板やビン缶など指定された場所に持つてゆく時、五分か十分で用が足りる処であつても

「杖をついていってくれよ。ころばないように気をつけて」
と、玄關の小窓から私を見送り帰ってくるまで、痛む足で待っていてくれる主人の姿に、私は涙を禁じ得ないのです。

両親に気まづい空気が流れた時、たった一人の息子の存在は本当に救いです。気楽そうに物言いますがよく考えて深いのです。じわつとしみこんでくる温かさがあつて何よりの支えです。じめつかず決つして饒舌ではないけれど、時々崖つぶちに立っているような私を引き戻して、穏やかな日々を鮮やかによみがえらせてくれる力があり、「アアア、頑張らなくちゃナー」と言う気持を駆りたててくれるのです。長身で顔立ちも良く頭脳明晰この一人息子は私共の自慢の種なのですが、横の物も縦にもしない寡黙な男でして、口下手で不器用で父親とも会話らしい事は殆んどしなくて、親としてはこれだけが不満だったのです。人は言つてはくれませんが、

「静かだけれど動かしがたい人柄はまことに良く、正直で一途で律儀、人交際は下手だけれど男のお喋りよりはるかに良いよ」と。朝は五時には家を出て帰宅は夜の十二時と言う厳しい職場で、宿直も多いので家族揃つての食事もできなかったのですが……

父親が限られた命と知った日から彼は絶えず話題をみつけ、ユーモラスな表現で会話の花を咲かせ主人に話しかけてくれるのです。燃えつきかけている老人の悲哀を絶望の淵から引き上げようと、痒い処に手が届くように女にもおよばぬ優しさで接してくれるのです。食欲がなければ栄養のつくもの、好きな物を車でどこまでも探がしてきたり、休日を利用し気ばらしに、日帰

えりで樂しめる処に連れてゆきます。車に乗せてしまえば大丈夫なのです。車で入口まで入れる処、車イスでも入れるトイレ、腰かけて充分余裕のある和食レストラン、息子は障害者用の箸まで持参ですので私はびっくり！ 退院した当時は食事には手もつけず、食べてくれない日が多くて、これは本当に主婦泣かせです。生きるために食があるのですから。栄養師に教えられた物をアチコチ買い求め、調理しても食べないと捨てなければならぬ。飢餓時代に青春をすごした私にとって、食べ物捨てると言う事が中々できないのです。なんとかして食べさせようと心を砕いて神経をとがらせていた私にとって息子の提案はうれしかったです。綺麗で広々として素敵なお音楽が流れ一品一品色とりどりの綺麗な器と、和やかな人々の声の中で、驚く程食べるんです、私の分まで。それをみつめる息子の慈しみのまなざし、そのぬくもりは私の心を和ませてくれます。父親の一举一動で何を欲しがっているか彼には解るのです。包みこむような心配りと優しさ、父親に対する純粹な愛情は真に見事なものでして「妻としての私の立場なんて全くないんです。」主人の体では段差のある家での生活は無理と医者に言われ、厳しい勤めの中で感性豊かな詩の世界のような川べりに介護住宅を建ててくれたのです。新築のキッチンも食器も新しいのです。でも殆んど二人だけの会話の乏しい食事です。テレビをつけても生の声ではない。料理下手な私は主人から賞められた事はない。賞めればつけ上り何日もつづくからでしょう。器を替える事もなく大きなお皿にドカンとのせる。花を活ける心で食欲が湧くように愛する人のため、創作した若い一時期もあったのですが……。週に二回今はアチコチにある和食レストランで食事をする事

になつてから、主人の顔色はよくなり楽しみになつたようです。会話のない古雑布のような私と違つて、綺麗な女の子がこぼれるような笑顔で接してくれますし、この街にこんな処があつたのかと驚くような、まるで中世の名画のような美しい処をみつけては車を走らせてくれます。とに角喰べさせる事が大事です。目新しい物を楽しい雰囲気の中で食べさせる。そしておしゃべり環境が替れば会話も生れる。すれ違う人との挨拶も楽しい。閉じこもらないで外の空気が必要。私にはそれを教えてくれた息子がいたから……。幼い時からおとなしい性格でもり勝ちで会話が始んどなかつたのに、私が動けなくなつた時、遅い勤めから帰宅すると洗濯機を回し夜半に米をとぎ、父親入院中は医師への対応は雄辨で見事、見舞客への心配りケースワークと納得のゆくまで話し合い、図書館に走り医学書を丹念により、男とは凄い者です。男盛り力はある敏捷な動作は驚くばかり、あの引きこもりみたいな子が唯々驚くばかりです。頼みの綱は丸山ワクチンと
言う事になつたのですが、ワクチンを打つ処は近辺にはなく指定の場所まで、雨の日風の日必ず毎日と言う事は付添う今の私には無理ですし、車代多額な医療費は毎日実費との事、ゆき処のない精神的疲労。経済面に頭が痛い私に、息子は『なんとしてもオヤヂを助けるんだ』と必死です。血は水よりも濃いんですネ。この息子のおもい天に届くかも知れない。私は手を合わせました。丸山ワクチンの相談にいった病院の担当医は『癌はマルヤマワクチンで必ず治るものではない。高令だし私は打たない方が良いとおもう。抗癌剤の点滴もあるが副作用が激しい。痛みは相当激しいものであるがひどくなつたらモルヒネを打ちますよ。今日はなんの薬もだしません』と言う

のです。『いくら多額の費用がかかろうとも助けてやる、オレのおやじなんだからナ』と言う息子の力強い言葉と、丸山ワクチンにすがればと言う一筋の光りが差しこんできたとおもったのですが……。夜になると鼻はでる咳はでる痰はでる、百年の恋もさめる吾が姿です。転がり回るような喘息の苦しみ一晚中寝られない、扁桃腺の腫れも中々ひいてくれない。

高令で大病したせいかわ私の全身はガタガタ考えたくはないけれど、主人のやがてくる最後に私は何をしてやるのだろうか。役立たずの私は息子の重荷になるだけ、家族にも社会にも迷惑かけない自殺つてないだろうか私は本気で考えました。ベットの下には着替の下着、枕元には湯呑み、ポット、脱脂綿、ティッシュ、飲み薬、タオル、手鏡、ガーゼ等、息子が私のために用意してくれた物。このこまやかな心使いに涙が止まりません。くり返しますが主人が退院した当時、食欲のない日が続き一体どうしたら良いのかと言う戸惑いで、私は神経がおかしくなってしまう時、息子がカニスープホタテのスープ等買ってきて飲ませ、和食レストランに連れてゆき、変化を楽しませるため立川、日野、相模原、青梅、町田方面にまで車を走らせてくれ、今、目をみはるような大きなスーパーが各地にできたのをみせてくれ高速でのドライブ。車から降り私に支えられて杖ひく主人に、すれ違う人々は笑顔で道をゆずってくれます。「渡る世間に鬼はない」すっかり笑顔をとりました主人、私は主人の笑顔を見ると凄く嬉しくなります。笑顔がこんなにも心を和ませるものかがよく解りました。息子は吾が家の忠実な運転手であり看護師であり家政婦でもあります。認知症の始まりか、私はよく水道の栓を締め忘れます。火を使うのも心もとない夫

婦にとつて、オール電化生活これは助かります。マツチもライターも不要の生活なんて夢のようです。建てつけの悪い以前の家の板戸の開け締めは、腰の力がない私にとつて重労働でした。今は時間がくるとシャッターが下り、風呂もトイレも小さなホテル並で至る処に手すりがありエレベーター付です。老親をおもう息子の心がこもっています。両親の介護に終日走り回る彼に因應するため私共も渋面を捨て笑顔で接する努力をしています。心配なのは彼も体をこわしたようなのです。共倒れになったら吾が家は全滅です。考えた末、職を辞する事に定めてしまったのです。朝五時に出勤後夜十二時の帰宅。ヘルパーさんの介護時間も短縮され、両親介護のため職場で仕事をしおろそかにできなかつたのでしよう。難聴のため電話番号もできない役立たず無駄に生きていくだけの私、息子の負担を重くし辞職までさせてしまい、申しわけなくて詫び乍ら一時自殺まで考えた事なども話し『今はお前のお蔭でトコトン見事に生き抜いてみせようとおもうようになったのよ。アリガト おとうさんをおいて先には逝けないものネ』

『連れ合いに先立たれた老いの男の哀しみ寂寥感、戸惑いはなかなか癒せるものではない哀れなものだよ。無駄に生きていく人間なんていないさ。オヤジにとつてオフクロの存在がどれ程支えになっている事か。側にいるだけで充分なんだよ。介護を受ける身で湿布薬の貼りかえ足の手当。腕を支えて歩かせたり洗濯食事の心配、よくやってってくれるよ。オレにとつても唯一人のオフクロだしナ』この言葉は泣きました。他に肉親はいないので。家族とは親子とはなんと言う美しいものでしょう。私は主人をおいて先には逝けない逃げていないで、愛する人生の同伴者として

苦しみを共に分か合う事こそ、まことの夫婦。死に至るまで生き抜かなくてはならないと教えてくれたのは息子です。ガン末期告知された主人ですが寝てばかりでなく、痛む足を引きずり乍ら不自由な手で草木に水をやり、習字の練習、日記をつけたりしてます。何故か私には優れた友が多くいて私の難聴を知っているので私を気遣って手紙を本当によくくれるのです。その封書の切手を不自由な手で一枚一枚丹念に剥がし施設に送るべく努力してる姿には胸が熱くなります。無駄に生きてる人間はいないので。妻にとつて夫は、夫にとつて妻は、そして親にとつて子は、子は親になってかけ替えのない宝ものです。献身生活に入った息子も時間に余裕ができ、元氣になりました。この素晴らしい宝物と明るい会話を交し乍ら、激流を見事乗り越えてみせますと、私は誓いました。息子がいてくれたからこそ、家族とは本当に良い者ありがたい者です。

〔東京都社会福祉協議会会長賞、運営委員会委員長賞は受付順で掲載しています〕